

「毛沢東以後への焦慮と安らぎ」  
 八年目の北京に見た中国の新体制

中嶋嶺雄

東京外語大助教授

中国は変わった。八年ぶりの第一印象はたしかにそうだが、新体制——周・鄧路線が内部にかかえる問題はいまだに根深くて大きい。

1 北京での感懐

——その二つの表情

去る一月八日、ソ連、モンゴル訪問を終えて中華人民共和国内モンゴル自治区へ汽

車で入境した私は、さらに一昼夜を車中で過したのち、数々のハブニングに出会った今回の旅行の興奮と、これから訪れる八年ぶりの北京への期待に胸ふくるるものとを覚えながら、翌九日の朝まだき、早々に目をさましていた。あたりはまだ暗かったが、冬枯れの窓外の光景が朝霧のなかにまもなく輪郭を示しはじめ、低いながらも熾々たる山容を呈した山並みが目に映る。見覚えの

あるその風景は、万里の長城の城壁が稜線に見えかくれすることによって、汽車が八達嶺を過ぎようとしていることを知らせていた。

三日間にわたる長途の汽車旅ではあったが、ここまできれば北京はもう近い。蘭州や包頭へ行く列車に出会うたびに小さな駅で待つためか、北京駅に着くまでになお三時間を要したが、お蔭で北京近郊の朝の農

村風景を堪能することができた。中国へ入境してから、即座に確認できたことだが、あの八年前の一九六六年晩秋、紅衛兵がいたるところに大群を成し、貨車のなかにも彼らが満載されていた当時の「紅々烈々」たる雰囲気にくらべたら、今日の中国はなんと静かで落ちついていることか。もとより、文革当時のように、駅頭でも車中でも「毛語録」や毛沢東讃歌が歌と踊り入りで繰り返されることなどはまったくない。三日間一緒だった車内の中国人服務員に、「中国に現われ出たり毛沢東……ああ彼こそは人民の偉大な救いの星」の歌詞で知られる「東方紅」をいまでも歌うのか、と聞いてみると、「会を開くときにメロディを流すだけだ」という。

毛沢東讃歌といえは、約一週間の今回の中国滞在中、テレビやラジオをのぞいてそれを一度も聞かなかつたし、駅頭では集衆のホームではほんの一瞬、時報がわりの「大海の航行は舵手による」のメロディを耳にただけであった。「毛語録」を読んだり、「批林批孔」運動の諸文献を学習したりしている光景にもまったく出会わなかつた。

かつては、農村の土壁にあれほど目立ったスローガンもめっきり少なくなっており、明らかにそこを塗り直したあととさえ見える。この点は、市内の故宫博物院なども同様で、旧紫禁城内の長大な城壁の一角などは、上塗りにすかして文革時のスローガンが見えたりもする。

朝の北京郊外は、これから一日がはじまるあわただしさを、当然のことながら感じさせるが、踏切りを待つトラックや軽自動車、車の列、北京郊外に特有の槐樹の並木道を走る耕耘機等々、これらの現象も八年前にはまったく見かけなかつたものである。

北京市内の変化も大きかつた。市民の足として知られる自転車は新しいものが多く、ホテルのまえにはタクシー（コロナが多い）が待機している。人民服も小綺麗なものが目立ち、少女たちは色とりどりのスカートでおしゃれをしている。東風市場や東単の市場には野菜や雑貨が豊富に並び、香港の國貨公司（中国系百貨店）を思わせるようだ。日曜日の頤和園や故宫は遊覧客で賑わい、カメラも一寸した新流行になっていて、昆明湖では子供たちが滑水（スケート）

あまし気味に雑談に興ずるほかはトランプをやっているし、そここの胡同（横丁）では「紅衛兵」の腕章をつけた少年たちがコマに夢中になっている。いま中国を蔽っているのは、「政治第一」の社会的雰囲気ではなくして、まさに「脱政治」ないしは「政治的アパシー」ではなからうか。文化大革命、林彪異変、そして「批林批孔」運動と相次ぐ激動と曲折のあとに民衆が見出し、期待したものがこそ、「政治」よりも「生活」そのものであったと思われ、このような方向こそ、今日の中国の大衆的潮流であるよ  
うな気がする。

だが同時に、以上の表情だけが北京なのではない。いうまでもなく、もう一つの北京がそこにはあり、それこそ、党中央であり、全国人民代表大会であり、中南海（中国首脳の居宅のあるところ）であるのであって、厳しくも激しい政治的ドラマの世界がそれである。ホテルの職員でも明らかに幹部らしき職員は、「内部刊物・注意保存」と記されているはずの「参考消息」（『参考消息』）を読んでいたのを私はたま

「人民日報」と「参考消息」、「諸君」一九七四年十一月号、参照）、まさにそのような「内部刊物・注意保存」、もしくは、これらの「密教的メディア」にしばしば書きこまれる「不得外伝」の世界が、もう一つの北京として厳然と存在するのである。そして、この世界については一般市民も外国人も同じ様に、そこでの出来事をつねに事後に知らされるのみなのである。

私は今回の北京滞在中、すでに全国人民代表大会の開催が迫っている状況をいくつか実感できたので（詳しくは、拙稿「モスクワ・ウランバートル・北京」、「中央公論」一九七五年三月号、参照）、人民大会堂にとくに注目していたが、やはり私の滞在中——その間に、全国人民代表大会は開幕していた——人民大会堂にはその堂内のかかりの部分にたえず電燈がともり、番兵の数も多かった。今回の全国人民代表大会でも二八六四名もの代表が、一堂に参集したのに、北京に数多いウォッチャーたち（在外公館員や特派員）にまったく気づかれずに済む秘密は、いまや、今回の全国人民代表大会のすべての文献や報告が引用していた「毛主席

の深く地下道を掘り……という方針」に代表たちが忠実に従って地下道を利用する以外にはあり得ないと思われる。

この点に関連して、聡明にも慎重な特派員諸氏がほとんど伝えてくれない事実だけを記せば、今日の北京では、有名な革命博物館、歴史博物館、人民革命軍事博物館、中国美術館、北京図書館などが依然としてすべて閉館のままであるほかに、市内随一の眺望が楽しめる小高い丘として知られる故宮裏の景山公園、その脇の有名な北海公園は、すべて一般の立入り禁止なのである。北海にかかる橋も峻重な鉄柵で囲われていて番兵がほぼ三〇メートル間隔で立っており、鉄柵から一メートル以内へ近寄ってはならないことになっている。景山公園や北海公園が中南海に近いためであることはいうまでもない。従って、中南海をわが国の皇居にたとえれば、丸の内のビル街やパレス・サイドビルが一切立入り禁止であり、外堀や日比谷公園も立入り禁止であって、祝田橋あたりは鉄柵がめぐらされていると考えば妥当であろう。

私は、八年目の北京の変化の大きさに驚

きながら、北京のなかに存在する平静な市民の表情と、「内部刊物・注意保存」もしくは「不得外伝」の世界という二つの北京の厳然たる存在に、そして両者のあいだの断絶の大きさに、いまさらながら多くの感慨を催さずにはいられなかった。この後者の「もう一つの」北京の内部で中国は十年ぶりの全国人民代表大会を開き、新憲法を採択して、新しい国家体制を整えたのであった。

## 2 歴史的移行期を担う

### 新体制

十年ぶりに開催された第四期全国人民代表大会第一回会議は、中国が文化大革命、林彪異変、「批林批孔」運動という激動と

(日本弁護士連合会編)

# 売春と前借金

控せんのことば

市川 房 枝

このたびはまた日弁連の手で「売春と前借金」を出版されることになったのは、まことにうれしく、この問題の関心者はもちろん、これに関心を持っている一般のかたがたにも是非読んでいただきたいと思えます

B6判・二七二頁 定価一、〇〇〇円 製箱入、B6判・

定価一、二〇〇円

# 公務員の争議権論争

浅野 義 治著

本論文は、地方公務員法三七条の合憲説の立場から都教組行政事件判決を批判的に検討することにより、同判決の結論に重大な影響のあった最高裁の全連中郵事件判決および都教組刑事事件判決をも併せ批判しながら、公務員のスト禁止立法の合理性を説明しようとするものである。

## 高千穂書房

〒173 東京・板橋・向原2-20-10  
振替東京155639 ☎956-6550

曲折のうちにたどりついた内政上の結節点

であっただけに、それはきわめて周到な準備のうちに実現したものであったことがうかがわれる。大会に先立って、この一月初旬から全国人民代表大会の予備会議が開かれ、大会直前には中国共産党十期二中全会が開催されて大会での議題や人事、とくに鄧小平の地位の著しい再上昇などが決められたことも、そのように周到な状況を物語っている。

こうして出現した今回の新しい国家指導体制の性格を分析してみると、そこには次のような二つの特徴が明白に浮かびあがってくる。まず第一には、林彪異変の教訓を学んだ中国が、文革以後、一九六九年の九大大会を頂点にして形成された一種の「兵

營國家」体制を、ここにはほぼ完全に脱却

し、同時に党・軍・政を貫ぬく中国共産党の一元的指導体制を形成したことである。

従って、形式上は、新憲法が明白にしているように、党主席にすべての統帥権が与えられたのである。同時に文字通りの一党独裁体制が國家体制をも包みこんで確立され、全国人民代表大会はいまや國家権力の最高指導機関(旧憲法)ではなくなつて、中国共産党指導下の國家機関になつたのであり、(新憲法第二 および第十六条)、中央人民政府としての國務院は党の一元的指導下の行政機関になつたとみなすことができよう。

このような政治装置(Political Apparatus)は、いかなる社会主義國家においても類例を見ないものである。憲法第二條に

は、「マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想はわが国の思想を導く理論的基礎である」と明記されたものの、伝えられた國家元首の規定もなく、毛沢東個人の名前も明記されなかったことは、「毛沢東以後」の時代への一つの配慮にはかならない。

このような配慮は、今回の新体制の人事面にも随所にあらわれているところであるが、憲法をみるかぎり、以上のような形式上・機構上の問題としてのみならず、いわゆる毛沢東路線が、たんに理論・思想面ばかりか精神的にも採用されていることについてはやはり注目せざるを得ない。それはたとえば、檢察権にかんして「重大な反革命刑事事件に対しては、大衆を動員して討議と批判をおこなわなければならない」（第二五条）とされ、まさに文革方式がとりいれられていること、張春橋の憲法改正報告にあるように、「毛主席の提案にもとづいて、改正案第二十八条に、公民は罷業の自由があるという内容を加えた」ことから明白であらう。

この「罷業の自由」、つまりストライキ権の問題は、「造反有理」の制度化だとい

ってよい。なぜなら、中國におけるストライキとは、政治的プロテストといつても、これまでは、毛沢東路線を阻止しようとした実権派にたいする造反を上から指導したものにほかならず、結局は権力者の恣意によつて発動されるものでしかないからである。

唯一の例外は、かつて一九五七年共の「百花齊放・百家争鳴」期における漢陽第一中学の教員・学生ストライキ事件であった。このときには約一〇〇〇名の学生と一部教師が、上級学校への進学問題に端を発して不満を爆発させ、共産党員の校長とその他五名の党員教師の辞職を要求してストライキとデモをおこない、やがて激しい共産党批判を展開したのだが、まもなく中國のハンガリー事件を恐れた党中央は、反右派闘争へと方向を急転させ、この事件の主謀者として副校長以下数名の教員が逮捕されたのち、やがて主犯三名の死刑執行が伝えられたのであった。このような中國において新憲法の「罷業の自由」は、社会主義的民主主義拡大の一環としてそれを考えるわけにはゆかないように思われる。

以上に見られる党の一元化指導体制の確

立と「毛沢東路線」の貫徹にもかかわらず、こうしたタテ座標にたいして、実務派官僚体制の再編成という厚いヨコ座標の定着が見られることが今回の第二の特徴であろう。この第一の特徴と第二の特徴とは、明らかに矛盾する二つの方向性を示しており、ここに中國新体制の大きな矛盾と問題点があることは明白であらう。そして第二の特徴が示す方向は、新しい國務院体制をはじめとする今回の人事においてとくに著しく、王洪文、汪青、李德生、姚文元、汪東興らのいわゆる文革ラディカルないしは文革イデオログは、新しい國家体制にまったく位置を占めなかったのである。汪東興にいたっては、名前さえ出ていない。もつとも、この点の評価にかんしては議論の分れるところであつて、張春橋を文革ラディカルの実力者とみなし、華国鋒が副総理兼任の公安部長、革命模範劇で知られる江青グループの于会泳が文化部長に新任しているなど、重要な部署を文革ラディカルが依然占めているという見方もあるが、しかし、鄧小平、張春橋を含め総じて実務派行

政官僚、実務派党官僚が人事面で優位を占めたという印象はぬぐえない。

この点を証明する重要な問題こそ、かつて十全大会の王洪文報告があれほど鼓吹し、「批林批孔」運動の根本精神でもあったはずの「反潮流」、「反復辟（反復権）」のスローガンが、今回は、新聞公報からも張春橋報告、周恩来政府活動報告からも完全に消滅し、「反潮流」という言葉さえまったく見出せないことである。つまり、「反潮流」運動としての「批林批孔」運動の挫折のあとに、はじめて今回の新体制が出現し得たのであり、その結果、たんに國務院人事のみならず、人民解放軍の諸人事にいたるまで、いわゆる復権幹部がその大半を占め、こうして「反復辟」もまったく空しいスローガンと化してしまったのであった。

### ●「毛沢東以後」への焦慮と安らぎ

私はいま、「批林批孔」運動の挫折といつたが、「批林批孔」運動は、昨年秋以来、当初の権力政治的ないしは路線闘争的性格を大きく変質させて今日にいたっているように思われる。林彪異変に閃遊した「八五七一工程」のなかの二つの刺戟的な文脈、すなわち毛沢東の専制暴君と

しての秦始皇帝、毛沢東のマルクス・レーニン主義の衣をかぶりながら実は孔孟の道を歩む者という刺戟的な文脈を含むこの文書を大衆的に流布させた責任は、十全大会の周恩来報告が暗示するように周恩来自身だと思われ、それはあるいは「毛沢東体制下の非毛沢東化」への遠大な周恩来戦略であったのかもしれない。

しかし、周恩来のこの戦略は、彼が主導してきた脱文革への潮流とともに「反潮流」グループの反叛を招き、十全大会前後から「反潮流」を旗印に「批林批孔」運動がまず始皇帝像のイメージ転換を指す揚秦運動として、次いで毛沢東こそ孔孟の道を拒否してきたのだということを示す孔子批判運動として展開されたのであった。この時期以後、「批林批孔」運動は明らかに周恩来批判を含蓄していたが、昨春来の壁新聞批判が中断したあたりから、逆に毛沢東側近体制への批判（その代表的な例が回収された『光明日報』七四年七月二十三日付の南鐘「韓非子・孤憤」訳注」論文であろう）も交錯しつつ、曲折をたどったのである。そして昨秋来戦線の統一と全民族の再団結が

叫ばれ、こうして「批林批孔」運動は当初の性格を変え、今日ではきわめてスコラ哲学的な瑣末主義の傾向を帯びつつ、一種のイデオロギー・キャンペーンになっているのである。

このような経緯のうちに迎えられた全国人民代表大会は、やはり一種の政治的妥協のうえに成ったものと思われるが、結果的に文革ラディカルは憲法に「毛沢東路線」を定着させることによって名をとり、実務派官僚は人事を主導することによって実をとったともいえよう。

だが、毛沢東自身、憲法は「根本大法」だといっているように、今日の、そして将来の中国においては精神や名目よりも実利的諸現実の方がはるかにリアリティをもつであろう。この点で「反潮流」運動の消滅にみられるように、やはり時代の要請への対応力をもった「潮流」の優位はあらそえないように思う。とくに、大衆の脱政治化状況のなかで、生活の向上と経済建設がますます重要な課題になりつつある中国において、周恩来報告が強調した経済計画とその諸体系の周到な達成こそ、いまや

潜在的な大衆的合意になりつつあるかのようだ。

以上のように見てくると、中国の新しい方向は全体として明白であるにもかかわらず、そこには二つの矛盾した政治の構造と実態がなお残っており、形式上の党の絶対的権限の強化は、その頂点にたつ党主席を「毛沢東以後」どのように考えていったらよいのかという点でかえって大きな不安を将来に残してしまった。同時に、いわゆるジェロントクラシー（老人支配体制）からの脱却はまだまだ達成されておらず、結局は、長老政治家がすべてそれぞれのポストを占めたのであった。

こうして中国はいま、「毛沢東以後」の時代への移行期に対応すべき体制をようやくにして形成しおえたという安らぎのなかにも、将来への大きな焦慮をそこに残しているのである。

### 3 毛沢東の権威を

#### どう見るか

私が今回の北京滞在中に痛感したことの一つは、毛沢東イメージにかんして中国内

部と外部世界とのあいだのギャップがあまりに大きくすぎるという問題であった。少なくとも北京にいるかぎり、毛沢東の権威

に驚きがあるといった兆候はまったく感じられない。それはいうまでもなく、一時のような毛沢東個人崇拜の馬鹿げた高揚はないにせよ、依然としていたるところに毛沢東の偉大さを示す装置がありすぎるためであろうし、毛沢東の指導力への懐疑そのものがタブーであるからであろう。この点に関連しては、今回、北京で確認できたことの一つであるが、新華書店などをのぞいてみると、かつて文化大革命の時期には、毛沢東の著作やパンフレットだけが並び、私はついに一冊しか買うべき本がなかったのにくらべて、今回は、中国版のマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作集をはじめ、「批林批孔」運動にかんしても、また小説、雑誌類にしてもきわめて豊富な種類の書籍があふれていたことを記さねばなるまい。

雑誌では新たに創刊された『歴史研究』や『北京大学学报』、『学習と批判』などが因では入手しにくい刊行物をはじめ、

百種類以上の本や小冊子を私自身購入しないではいられなかったことにも、それは反映していよう。

一方、こうして毛沢東個人の相対化がすすみつつある反面、天安門はいうにおよばず、主要な建造物のすべてに毛沢東の肖像がかかげられており、「毛語録」のあの赤い本は誰も持ち歩いてはいないものの、いたるところに「毛主席語録」の看板が存在することなどは、当然のことながら、毛沢東の権威の重みを感じさせる。

一方、外部世界では、今回の全園人民代表大会をめぐっても、毛沢東の地位の後退が一部でささやかれている。とくに『ニューズ・ウィーク』誌が一月六日号以来、昨秋の武漢郊外・東湖賓館における「毛沢東の三十七項目にわたる自己批判説」を、今回の全国人民代表大会への毛沢東の欠席に関連させて紹介して以来、この点についての多くの関心を呼ぶこととなった。もとより、「毛沢東自己批判説」の真偽は定かではなく、そもそもこの情報自体、すでに昨年末、香港で流れていたものであるし、かつての「八五七一工程V紀要」や「憲法草

●「毛沢東以後」への焦慮と安らぎ

案」のように文書で実行けられたものではないので、これだけではやはり「香港情報」の域を出るものではないであろう。毛沢東が昨秋来、北京を離れ、一月の二中全会にも全国人民代表大会にも出席していないうことは確実視できるが、しかし、全国人民代表大会は制度的には党の一機構と化したうえに、毛沢東自身、前回は前々回も名簿に名を連ねているだけで、いかなる報告も挨拶もおこなっていないのだから、その欠席自体はとくに大きな意味をもつものとは思われない。

その老齢化と絶対的権威のゆえにすべてをまかせて北京を離れ、悠々と冬の保養につとめているとみなすこともできなくはないのである。

一方、「反潮流」運動の挫折は、たしかに毛沢東の指導力の限界を示すが、しかし、そのことが毛沢東の権威を著しく傷つけるまでになっているともいいがたいようである。

私は今回、一月十日の北京のテレビで、マルタ共和国のミントフ首相と会見した毛沢東をやはり八年ぶりに見る事ができ

た。私の率直な印象からしても、その老齢化はもはやあらそう余地がないようであり毛沢東に実務的・行政的指導を期待することは、ますますできなくなつてゆくであろう。

しかし、そのような行政的指導能力の低下が、彼の象徴的・カリスマ的権威の低下にまでつながると見るのは、いささか短絡的でありすぎるようでありむしろ、毛沢東の行政的指導能力の低下を補助しつつ、やがて来るであろう「毛沢東以後」の時代への移行期を担うべき体制が、ともかくここに確立されたと見るべきではなからうか。

変化の時代 = 実力を身につけるための仕事に直結した専門教育

50年度前期生募集中(男・女)

攻 率 専 専 攻  
攻 率 率 率  
専 率 率 率  
専 率 率 率  
攻 率 率 率

- 通学課程と同一の短大卒業資格を授与
- 書類選考により入学を許可
- 出席しやすい地方(補講)スクーリング
- 中卒者・高校中退者等は認定試験による入学の途あり
- 女性にも必要な管理能力の養成に
- 有能な女性秘書となるために
- 国家試験等受験の資格取得
- 企業内・官公庁の昇任昇格試験準備に
- 中小企業診断士・経営コンサルタント試験に

入学案内書250円(切手可)

〒158 東京都世田谷区等々力6-39-15 TEL 03-702-4151(代)

産業能率短期大学 教務部通教A係

大学通信教育



## 「開かれた中国」 への「外圧」

そもそも、きわめて政治的背景の色濃い路線闘争としての「批林批孔」運動が、曲折のうちに収束しはじめ、多くの矛盾のうえになお周到な配慮を含む全国人民代表大會が開催された事実は、「毛沢東以後」の時代がすでに開幕しつつあることへの中国指導層の深刻な認識と将来への焦燥が一種の政治的凝集力となってここに表出したこととあらわれではなからうか。

そのような凝集力は、いまや、たんに中国内政上の要因からのみならず、外部世界からの諸要因によっても、収斂されざるを得ない。

今日の中国は、その内部に依然として禁断の世界を残しつつも、中国を繞る国際環境の大きな変化のなかで、国際社会における中国のプレステイジの増大と比例して例く、この巨大な國家を「閉ざされた中国」から「開かれた中国」へと徐々に誘おうとする歴史的な「外圧」に直面しているのである。中国が「自力更生」を唱えつつ

も、他方では、国際社会とくに日本や西欧諸國そしてやがてアメリカとも交流の窓を拡大しなければならぬであろうことは、対ソ戦略を基本的な外交方針とし、工業化

と国民経済体系の完成を基本的な国内方針とするかぎり、いまや必然的な方向であり、まさに、こうした潮流こそ歴史的な性格と方向性を帯びたものなのである。そのような中国にとって、西側世界との交流の拡大は一つの麻葉でもあろう。現にわが國を訪れる代表團や滞日中の各種スタッフ、その社会的断絶の大きさゆえの衝撃に耐えんとして、いわゆるブルジョア的な対象にたいしてはいかに禁欲的に「三民主義」に徹しようとするかについては、すでに知る人の多いところである。

当面、こうした「外圧」に耐える力と価値観を中国は保持しているとはいえず、外部世界との交流や中国を訪れる外国人が各地に滞在する機会が増大するにつれて、両者のあいだの大きな隔差がもたらす衝撃が、中国民衆の意識性を揺りくずしてゆく可能性も皆無ではないのである。それゆえに、たえず「批林批孔」運動のような運動を今

後も継続してゆかねばならないのであろうが、このような「外圧」にいかに対処すべきかという焦慮も、また当然、一つの大きな凝集力を形成し得るのである。

中国への賓客が滞在する北京飯店の新館は、その偉容といい、設備といい、世界の一流ホテルと変わるところがない。そこに昨年、中国で最初の自動ドアがとりつけられたとき、北京の市民は、自動ドアを一目見ようとホテルの前に黒山の人だかりをつくったという。

私は今回、このホテルにも入ってみたが、ちょうど夕暮れどきの王府井の人ごみのかから流れ出た上京者らしい一群が長安東街に面するこのホテルに近づいて、自動ドアを見物しようとやってきたとき、見張りの警官は、不機嫌に彼らを追いはらってしまった。

われわれ外賓は自由なのに、どうして一般市民はこのように拘束されるのかと、中国社会の厳しい断面の一角に遭遇して、私は思わず心を閉ざされたのである。追いはらわれていった人びとの心にはなにが残ったであろうか。